

子どもの発達に対する母親の影響

伊藤 榮子

Mother's Influence on Child Development

Eiko ITO

要旨：歩行期から青年後期のどの段階に社会、家庭の基本的生活の型を獲得し、自己抑制、自立に誰が影響しそれが現在も持続しているか探るためにA短期大学看護学生とB大学生64名に無記名の質問紙調査を実施した。その結果、以下のことが明らかになった。

(1)子どもの成長に対する母の影響は、家庭、社会生活の基本的な型の習得に、父、兄弟姉妹、祖父母、教師より大きく、歩行期に最大で、今も減少しながら学生の生活に役立っていた。

(2)学童中期の初めに子どもが自己抑制を身につけると、母以外の他の影響が増えはじめた。この不明確な影響は集団社会が持っている、人に新しい精神的、肉体的な能力をあたえると思われる機能の影響が、学童中期から青年後期の初めに多くなった。

キーワード：母の影響、子どもの発達、歩行期、学童中期、自己抑制

Summary : To Explore in which stages of toddlerhood to later adolescence, who and , to what extent, had greater influence on child development in forming basic domestic and domestic habits, lifestyle, self-control and self-regulation currently sustained. I surveyed by a questionnaire to 64 students of A nursing junior college and B university. The following results were obtained.

1. Mothers had a greater influence on child development, especially in the stage of toddlerhood to middle school age than fathers, brothers/sisters, grandparents or teachers, and from that time on decreased, yet is now a helpful point of students' life.

2. Other influences began to increase early in the middle school ages when children begin to acquire a sense of self-control. These undefined influences might be affected by residency in a regional community, whose functions are to give new spiritual and physical abilities to its people.

key words : mother's influence, child development, toddlerhood, middle school age, self-control

はじめに

1970年代頃まではマイホーム核家族の主婦が家事育児を専業とする生活が、妻たちのドリームであったようだ。女性たちは母親役割に専念する生活を喜んで受け入れ子育てや教育に過熱していく母親もいた。その後、女性の高学歴化が進むと女性のライフスタイルも多様化し、女性は家事・育

児以外の生活に進出し自らの存在理由を求める意識が高まってきた。

人格（性格）形成に影響を与え責任がある人たちは親・大人であり、成長してからの人格形成は本人の責任と言える。現在、両親が職業を持つのは時代の趨勢であるにしても、親が子どもに必要な影響をどの時期にどのように与えているのかの

報告は見あたらない。

Erikson (1963、1967) の理論的後継者とみられているBarbra M.& Philip R. Newman (1984) も同様に人生を心理社会的な発達過程と捉えている。Erikson (同) は基本的に、発達は胎児期の発達(発生学的過程epigenetic process)がDNAの発現スケジュールに従って行われるように、社会的生物である人間は出生後は心理社会的にも発生学的スケジュールがあるとし、その発達は段階を踏んで起こる(漸次的成長、即ち「漸成説」)と考えている。

Eriksonは人の心理社会的発達を8つの段階に分けて提唱し、各段階の特質を詳細に検討し、クリアすべき課題をクリアしないと次の発達段階では心理社会的負担が残存して加わり、生きるための目標達成が困難(危機)になる事実をふまえ、それを漸成的発達モデルで実証している(1963)。Eriksonの理論は特に心理学、教育学、精神分析学、社会学、宗教学などの多方面から関心を持たれてきたが、その理論的枠組みを継承したNewmanらは、発達段階にさらに2段階を加えている。

後述するように、子どもの母親にはEriksonがいうヌミノース的要素と分別的要素が備わっている。これは母性に自然に備わる必然的条件のようなものとされ、それが現在、女性の社会進出に伴って、どの程度機能しているかが問題となるように考えられる。それに進む前に、本稿では調査数は少ないが、現在、誰が何時、どの程度、子どもの発達に影響を与えたかを明らかにしてその傾向の概略を探りたい。またNewmanらの人生区分の特に乳児期～歩行期、学童中期の子どもの発達において無意識のうちに誰もが恩恵にあずかった母親(養育者)に備わるヌミノース的要素と分別的要素の機能をEriksonの理論から確認しておきたい。その要素が果たしている機能の理解は、幼児のケア(養育・看護)ばかりでなく、母性、母子関係の理解をより深めることにつながると考えられるからである。

I. 研究目的

子どもは成長のどの段階に誰に影響を受け、その影響が現在どの程度現存しているかを探る。

II. 研究方法

1. 用語の定義

1) 影響者

調査対象の成長に影響を与えた人、ここでは父母、祖父母、教師、その他を指す。

その他には兄弟姉妹、友人、テレビなどのメディア、小説(作中人物)等も含む。

2) 影響現存

影響者に受けた影響が現在も日常化されて自分の行動様式に組み込まれ持続していること。

3) 不明(者)

調査対象の成長に影響を与えたが、特定できない(人)。

4) 段階(期)

ニューマンら(前)らの発達論の漸成的発達の各段階に拠る。Epigenetic chartでは発達の段階を乳児期、歩行期、学童前期などに区分している。

2. データ収集方法

データ収集はアンケート調査により次のように実施した。

1) 対象

調査対象はA短期大学看護学生2年次生71名、B大学2年次生16名を含む87名。B大学2年次は専門科目として「小児保健」を学んでいる。有効回答者数は64名(73.6%)である。

2) データ収集期間

調査は平成20年9月5日～9月16日に実施した。

3) データ収集方法

幼い頃からの人格形成の軌跡をたどり、しつけや人格形成の要素は、その後の成長の過程でどのように消長しているか、影響を受けてどのような生活の基本的な項目が現存しているかを調査するために、当然なこと、よいこととして受け入れられる(親社会的または順社会的な)基本的な生活習慣40項目を設定し、項目ごとに下のa)～d)に類別した。調査対象はその各項目が「できた/できる状態になっている」ものを選択するようにした。

これらの質問項目はニューマンら(前)の発達課題における道徳的判断の段階(前因習的～後因習的)、親社会的行動～社会的責任(良心)、美と道徳的価値の統合(歩行～学童前期)、勤勉性の感覚と有意な能力の形成・達成動機(学童中期)、抽象的・理論的変化の仮説の把握

(ピアジェがいう形式操作)、現実と未来(青年前期)、同一性(達成・早期閉鎖/拡散、青年後期まで)の発達段階の普遍的と考えられる特徴を取り出し、伊藤(2002)を参考にして子どもの生活の観察により日本の文化的背景と子どもの水準に合った表現で、親/順社会的行動からなる項目にした親/順社会的行動の場合は、クロンバックの信頼係数は限りなく1に近似し、 $\alpha \approx 1$ (注1)。これを以下の(1)選択肢のa)~d)にまとめ、クリアすべき達成項目(例)とした(注2)。調査は幼少期の記憶に関わるので、記憶不明な部分は家人に聞き確かめて記載するように依頼した。資料は個人情報に関する内容なので封筒に入れて回収した。

(1) 選択肢(項目)

以下のa)~d)について「何歳頃」、影響を父母、祖父母、教師、その他(兄弟姉妹、友人など)の「誰」に受けたか、また誰に影響を受けたか不明だ(特定できない)が影響を受けて、その影響が現在も自分の行動に組み込まれ現存しているかどうかを見た。

a) 生活の基本的な習慣の形成

家庭・社会生活などの日常的な習慣形成、倫理・道徳性、協調性、責任感に関わる項目で、後片付けができた、お手伝い、皆と遊ぶ、挨拶、人の話を聞いた、礼儀、ルールの遵守、仕事の分担、頼まれたことは終りまで行う行動に下位区分した。

b) 家庭・社会生活の基本的な型の習得

家庭・社会生活の基本的な型は学童前期に習得される。この段階で生活の型は次第に洗練され清潔・身体の安全などの確立から体調・危機管理、歯磨き習慣、嗽と手洗いの確立、食べ物の好き嫌い、お部屋の整理、きれいな手や爪、身に着けるものの清潔、見知らぬ人への用心、慎重な対応、自分でいろいろ準備する、危険回避、体調を考え無理しない行動に下位区分した。

c) 自己抑制と自律

積極性、自律から理想追求に関わる内容で、着衣は自分でする、脱いだクツを揃える、大人や先生の話をよく聞く、よいことは自分からする、読書を好む、考えたり工夫をする、自分の話を聞いてもらおうとする、何になりたいかよく話す、したいことがあればそのために辛抱できる、何が起こるかを予測して行動するなどの行動に下位区分した。

d) 自己同一性の確認と自立

青年前期(13~17歳)には自分はどのような集団に属するか、集団から疎外されないように葛藤を持つ傾向があるが、青年後期(18~22歳)にはどのような才能や能力を持つのかなどの自己同一性を確立する。この段階については自己期待・能力・興味・達成欲求のような個人的要因は将来の職業選択に情緒安定、判断の慎重さ、自己陶冶、人間性に関わる内容が課題となる。これらの課題の行動上の下位区分の例は、情緒が安定している、友達のよいところが分る、困っている人に親切にする、ゴミは決められたように出す、自分の失敗は自分の責任だと分る、判断は検討してから下す、意見は賛否両方を聞ける、論理的に行動する、親の愛情は子の助けになると気づく行動とした。

(2) 記載の方法など

調査では、影響を受けたそれぞれの項目はどの発達段階に影響を受けたかを、年齢を併記し、受けた影響と発達段階が連動して区分できるようにした。

3. データ分析方法

調査結果は単純集計し、上記a)~d)のクラスターごとに母と母以外の影響率、影響現存率について有意差の有無を検定した。分析の概要はニューマンらの心理社会的段階での発達区分に従って以下の(1)~(2)によって行う。

調査対象の現在の年齢は20歳で青年後期に含まれるため、その年齢までの心理社会的段階の歩行期(2~4歳)、学童前期(5~7歳)、学童中期(8~12歳)、青年前期(13~17歳)、青年後期(18~22歳)までとした。

(1) 成長の各段階の影響率

(2) 調査項目ごとに影響を与えた人たちの影響数と現存数

4. 倫理的配慮

調査にあたって、調査を依頼した人たちには研究の目的を文書を用いて以下の1)~3)とともに説明して、個人を特定しない、成績には関係しない、また本調査は強制ではない、個人の不利益になるようなことには用いないという条件で、許容できる範囲と部分だけの回答をするように依頼した。書き込まれた調査用紙は封筒に入れて回収した。

1) 調査結果のデータは統計処理をして研究の目的のみに使用する。

2) 調査の回答は自由意志による、回答及び統計処理後のデータは研究以外には一切使用するこ

とはなく、研究終了後に破棄する。

3) 本調査は日本赤十字秋田短期大学倫理審査委員会の承認を得た。

Ⅲ. 結果

調査結果は、自分の成長によい影響（以下、影響）を与えたとする項目毎の回答数とその影響の現存率を見る。

1. 成長の各段階の影響について

調査対象が調査項目に対してどの発達段階に影響を受けたかを知るために歩行期～学童中期までに受けた影響数をまとめた（表1）。

成長の段階の影響率は、歩行期29.5%、学童前期60.2%、学童中期80.8%と推移している。

自己抑制を表す<6. 自分を抑えて人の話をきけるようになった>は、影響率は歩行期23.4%、学童前期50%、学童中期15.6%である。学童中期の段階までの影響率は89%に達する（表2）。

2. 影響者の全体的な傾向

子どもに影響を与えるという場合、影響は普通は良い影響を意味する。与える側には親の期待、願い、社会的要請からくる圧力も潜在すると思われる。ここでは親や他人の良い点を模倣する、学習する、あるいは期待に応えた影響と捉えている。

1) 調査40項目全体の平均影響者数は、父は1.6人、祖父母は1.0人、教師は2.2人で、平均の合計影響者数は4.8人である。

2) 母の影響者数と影響現存数（以下のカッコ内は現存数）の平均は、15.9（12.5）人、その他（父、祖父母、兄弟姉妹、教師、友人）は6.3（5.2）人、影響不明（者）数は36.9（16.6）人である（表3）。

3) ここでは次の規準を設けて回答を類別する（表4）。

1) 母と母以外の影響現存数を比較する（表4）。

2) 類別は以下のa)～d)による。

3) 学童中期（12歳）までにどの程度の影響（率）を受けたかをみる。

a) 生活の基本的な習慣の形成（しつけ）

以下の7項目は歩行期（2～4歳）を中心に獲得される内容といえる。この7項目は母の影響の平均現存率が36.7%で、母以外の平均影響現存率は合計9.6%であり有意差があった（ $p < 0.05$ ）。

11. 歯磨きの習慣ができた

4. 近所の人に挨拶ができるようになった

16. ハンカチ・下着を清潔にしていた

15. 手足や爪をきれいにした

2. 食事の準備などを手伝おうとした

21. 下着などは自分で着ようとした

7. 礼儀正しいほうだった

b) 家庭・社会生活の基本的な型の習得（躰）

以下の11項目は主として学童前期（5～7歳）を中心に獲得される内容といえる。この内容に対する母の影響現存率の平均は24.1%で、母以外の影響現存率の平均は13.2%で、両者には有意差があった（ $p < 0.05$ ）。これら11項目は〈40. 親の愛情は子どもの成長の助けになると気づいた〉を除けば、学童中期までには40.6～93.7%の回答者が影響を受けている。この項目には社会的により洗練され精緻な訓練を含む躰、身の処し方が含まれる内容である。

18. 必要なことは自分でしようとした

12. 家に帰ったら手洗いと嗽をするようになった

34. ゴミは決められた方法で捨てた

17. 知らない人にはついて行かなかった

33. 困っている人には親切にするほうだった

1. おもちゃや絵本の後片付けができた

22. 玄関で脱いだ靴はそろえた

5. お友達には親切にするほうだった

40. 親の愛情は子どもの成長の助けになると気づいた

19. 危ないことはしないようにした

14. 部屋が散らかっていると気になった

c) 自己抑制と自律

以下の13項目はグループは自己抑制（セルフコントロール）・自律（自己規制）の獲得とともに発達する。自己抑制と自己規制は歩行期から既に獲得される発達課題で、その次のステップである学童中期（8～12歳）における発達の土台のような能力といえる。従って以下の13項目は自己抑制と自律が試される項目といえる。

自己の能力が次第に分るようになり、劣等感も経験するので、その反動のようにこの時期は技能の習得などの勤勉性が獲得されるという特徴がある。

母の影響現存率の平均は14.1%、母以外の影響現存率平均は14.8%で、両者には有意差はなかった。これらは学童中期までに56.3～96.9%の回答者が影響を受けている。

10. 引き受けた仕事は責任を持って行った

23. 親や先生の話は聞こうとした

- 8. 遊びや学校のルールは守るほうだった
- 37. 親は子どものすることに責任があると気づいた
- 25. 本を読むことが好きだった
- 20. 体調不調のときは無理をしなかった
- 38. 人の意見は賛否両論を聞けるようになった
- 13. 食べ物の好き嫌いをなくそうとした
- 31. 大抵はニコニコして機嫌がよいほうだった
- 9. 家では自分の分担の仕事があった
- 32. 友達の良いところが分るようになった
- 6. 自分を抑えて人の話を聞けるようになった
- 24. 良いと思ったことは自分からしようとした

d) 自己同一性の確認と自立

自己確認と自立への道を方向づける内容は青年前期（13～17歳）と青年後期（18～22歳）にかけて獲得される内容といえる。以下の9項目は、母の影響の現存率平均は7.3%、母以外の影響の現存率の平均は15.6%で、母以外の影響現存率が高い傾向にあった。これらは学童中期までに57.8～96.5%の回答者が影響を受けている。

- 35. 自分の失敗は自分の責任だと気づいた
- 39. 論意的に考えて行動するようになった
- 29. 理想実現のためには少し辛くとも我慢した
- 30. 物事を予測して行動できるようになった
- 36. 判断はいろいろ検討してするようになった
- 28. 将来何になりたいかよく話した
- 3. 皆と一緒に遊ぶことを好んだ (96.9)
- 27. 自分の話は「ネ！聞いて」と言うほうだった
- 26. 考えたり工夫したりするほうだった

IV. 考察

幼児教育では次のように言われている場面がある。「三歳児は幼児期の中でもとりわけ大切な時期であり小さな意思（意志）が芽生える時である。三歳ころに言葉を獲得することによって自我が確立し、自分の考えを主張して、自分の意思（意志）で行動する。父母や保育者に依存していた生活から人間として自立（自律）した生活を歩み始める。」（注2, 3）

上記のように子どもは歩行期の三歳ころまでにことばを獲得し始めると、欲求（本能）や要求、好奇心などをことばにする。

歩行期から学童前期には、子どもは自分の能力が足りずに、あるいは親による束縛、兄弟・仲間同士の反抗などが原因で、怒りを表出する。怒り

はもっともなもので納得できるが、親との間に緊張を引き起こす。そのとき、親はできるだけ怒りの感情抑制の手法・技術・言語表現などで怒りを抑制するか問われ、親自身の抑制法がモデルとなる。怒りの原因者の立場を説明し同情をする、などがコントロールの仕方である。「怒りの表出はここまで」という尺度を示すなどの、自己抑制の仕方を親などから学び、コントロールの仕方を見失わず怒りを表出できる子どもは、自立への発達において極めて多くのものを獲得できる（伊藤、2002）。

子どもの発達過程におけるこのような影響の推移から見ると、次の段階へのステップの契機となるカギは自己抑制である。ニューマンら（1984）は、セルフコントロール（自己抑制）は歩行期（2～4歳）に獲得する発達課題であり、環境抑制（人、ものを含む自分を取り巻く環境を自分の思いのままにすること）との対比で論じクリアすべき重要な発達上の課題としている。

調査項目全体から見ると、影響平均数は母15（12.5）人と母以外の家族・教師・友人は11.5（5.2）人で、意外に影響は少ない（カッコ内は影響平均現存数）。

それに比べて不明（者）の影響平均数は36.9（16.6）人で多い（表3）。調査対象は調査項目については無意識のうちにいつのまにか習慣として学習していたという推測もできる。歩行期・学童前期の記憶は不確定だが、それ以後の記憶の中でも母だけの記憶が比較的大きい。父、祖父母、兄弟、教師などの影響を受けたという意識は少なく、それだけ存在感は希薄であとみられる。影響者が不明だが影響を受けたとする内容は保育所・幼稚園・学校などの当然受けるべくして受けた影響が想定できる。

調査結果から子どもの成長に大きく影響するのは学童中期頃までに母（養育者）が最も多いことが見えてきた。ここでは主に母親を考察の対象にする。厄介な歩行期（Newmanら、同）と言われている期を中心に母親の子どもの発達への影響の一般的な観点から考えたい。そして母親（養育者）とは基本的にはどのような立場（stance）にあるのかを確かめておきたい。

1. 影響を受けた段階（期）と影響の推移

ここでは成長のために受けた影響（平均値）の推移から見る。影響それ自体は、自ら成長しようとする内的な成長欲求（親から受け継いだDNA

発現など)、また周囲からの期待や社会的要請(教育)への方向づけと受けた影響の内容の両方に起因する影響を受けると考えられる。

ここででは発達の各段階(期)における影響の特徴的な部分である以下の(1)~(4)を取り上げる。

受けた影響は、歩行期(29.5%)から学童前期(60.2%)の間は30.7ポイント増えて格段に大きい。学童前期と学童中期(12歳)の間に受けた影響は緩やかで14.8ポイント増えているだけである。学童前期までに影響が80%以上あった項目は15項目であったが、学童中期(小6)には23項目に拡大した。この発達に対する影響の拡大の分岐点は自己抑制を示す〈6.自分を抑えて人の話をきけるようになった〉にあると見る(表2)。

その理由は次のようなものである。母の影響の現存率が極めて多い項目のクラスターは、a)生活の基本的な習慣の形成(しつけ)と、b)家庭・社会生活の基本的な型の習得(躰)までである。

その次のステップにあるc)、d)のクラスターには〈6.自分を抑えて人の話を聞けるようになった〉のように、自己抑制を必要とする項目だけが残るからである。学童中期までに見る子どもの発達の過程で受ける影響の違いは次のように言える。(次の1)~4)は「表4」のa)~d)に対応する。)

1) 家庭生活における基本的な習慣(しつけ)の成長への影響

これは家庭において半ば強制的に身につけ学ぶ事柄であり、成長における自己抑制を獲得しながら達成する項目といえる。

受けた影響の大きい順位から見ると、この「自己抑制」の前には、影響の質が異なる項目は概ね次のような内容になっている。順位では〈6.自分を抑えて人の話をきけるようになった〉の前には80~90%もの影響を受けた項目があり、子どもが素直に学ぶ必要のある生活の基本的要素となるものが並んでいる。歩行期の発達の特徴はセルフコントロールを目指しているといっても言いすぎることはないようである。それが獲得されないと次のステップの自発性を伴う行動の発達は思うように進まないと分るからである。

2) 自発性を伴う行動への影響

影響率の大きい順位で自己抑制を要する項目の次には自分から家庭と社会におけるルールを守る、

社会的責任、礼儀、友人のよさ、よいと思う事柄の実践、読書を好む、安全など自分の意思による行動を伴う項目がグループを形成している。

これらは社会生活における好ましい内容で、80%台の人がこの期までにそれらに影響を受けたと回答している。

3) 自律心を伴う行動への影響

学童中期までに70%台の影響を受けたとする項目は、さらにその次のクラスターである。

このクラスターは危険回避、創意工夫、家事役割分担、将来の夢、失敗は自己の責任、食べ物の好き嫌いをなくす、情緒安定などの項目がある。これらは自己抑制と共に自発、自律の心を必要とする項目である。エリクソン(1963)、ニューマンら(1984)の発達段階では、学童中期は勤勉さ、勉強・努力・頑張りが能力の承認という報酬を獲得することであり、それが特徴であるとしている。この期は自分の能力を評価でき、恥を知る段階であり、これをクリア(獲得)すべき重要なこととしている。

4) 自己の成長と判断モデルを要する行動への影響

学童中期までの成長の過程で60%台の回答者が影響を受けたとする項目は、部屋の整理整頓、予測して行動する、いろいろ検討して判断する、理想実現には辛抱が伴う、体調不良の際は自重する、人の意見は賛否両論を聞くなどがあり、より高い自己抑制と忍耐と判断の慎重さと積極性が要求される。仲間や経験を積んだ者のモデルや内省が有効に機能する側面である。自分が他者と同一集団への所属の確認、それを越えた自分自身のアイデンティティの確立・確認に向かう準備段階と言える。

これらに加えて認知的成長を要請する行動の影響(要請)がこの学童中期までの段階では40~50%見られる。論理的行動、親の責任、親の愛情の理解などであり、認知的、人間的としての発達が待たれる側面である。子どもの更なる成長がないと自分では到達できない側面である。

青年後期まで影響を受けた項目は、自分の失敗の責任は自分にある、判断はいろいろ検討してからするようになった、親は子どものすることに責任がある、人の意見は賛否両論を聞いてからする、論理的に考えて行動する、親の愛情は子どもの成長の助けになると気づいたなどである。

これらは何時影響を受けたかは分らないうちに、つまりいろいろな人たちとの交わりや経験をとお

して獲得する、人格のより深い陶冶を伴う要素と言える。

2. 影響者の全体的な傾向

この調査では子どもの発達に影響を与えた人たちは母、母以外（父、祖父母、教師、兄弟姉妹、友人など）、不明者つまり誰だか分らないが影響を与えてくれた人たちに分けた（表4）。

1) 母の影響の現存

乳児期における乳児の習わし（この場合、乳児のしぐさなどの癖、傾向）で「危険と悪」の回避は両親の責任である（Erikson, 1963, p.106）。

母の影響が大きく及ぶ期は歩行期と学童前期である。この発達段階の母と母以外の比較では、母の影響現存率は生活の基本的な習慣形成が圧倒的に高い。この傾向は家庭・社会生活の基本的な型の習得という部分にまで行き届いている。以下はその項目である。

(1) 基本的な習慣（しつけと躰）

必要なことは自分で準備する、おもちゃや絵本の後片付けができ、玄関で脱いだクツはそろえる、お部屋散らかっていると気になった、は実際は生活の秩序の維持・回復を意味する。家に帰ったら手洗いと嗽をするようになった、は清潔・身体の安全を、知らない人にはついて行かない、危ないことはしないようにした、は安全・危険回避の基本である。また、困っている人には親切にするほうだ、お友達には親切にするほうだった、は社会生活の基本となる部分である。これらはより洗練された社会生活の型を身につけるための「躰」といえる。

これらは「表4」におけるa) 生活の基本的習慣の形成（しつけ）とb) 家庭・社会生活の基本的なグループと言える。子どもの発達には文化（生活様式）の型にはめ込む半強制的な「(お)しつけ」と洗練された生活の型の獲得に向かう「躰」がある。

(2) 母親の影響が及ぶ例

(i) 母親のヌミノース的な要素

乳児が定期的に必要な授乳や排泄の処理のためばかりでなく、それ以外にも様子を見る機会があるごとに母親（養育者）を見て、命名された自分の名前を繰り返しよばれたり、挨拶を交わすうちに母子間に共有された相互認知がおこる。子どもにとって原初的な親に凝視され、それに応答することを子どもは欲求するようになる。マザリングの中のこうした両者の定期的な出会いが、最初の

定期的な極めておぼろげな確証は神聖なもので、顔をのぞきこむように傾げた顔にかすかな微笑を浮かべて応じてくれる。そしてその神聖な者の胸に抱きかかえられる特権を自分も持っている。こうした母親（養育者）の存在の感覚をエリクソン（1977）は、ヌミノース的であるという。母親は定期的な儀式のように現れて自分をケアしてくれる聖なる存在である限り、一時的にその存在を見失っても（分離されても）必ず戻ってくるという、乳児期において体験される希望の原基となる人がいるのである。それが（母子）分離性の超克を保証してくれる（=愛着）。このような神聖な最初の出会いは、あらゆる集団がイメージとして抱く宗教儀式的な要素に対応しているという。この宗教儀式的な要素とは、例えば宗教的儀式の場における聖マリアが赤子を抱いた偶像によってもたらされる雰囲気似たものと思われる。

しかし、マリア母子像のような母親（養育者）には次のような、もう一つの要素（機能）がある。

(ii) 母親の分別的（裁判的）な要素（機能）

乳児期から歩行期の段階になると子どもは自分という存在を客観的に評価する者に遭遇する。這う能力から立つ能力が発達するにつれて自己-信頼が増大し、許容される限界を試す（弄ぶ）という行動が現われてくる。この時期に根づく基本的強さは「意志」だと考えられる。歩行に伴う筋力と移動能力、認知能力の発達がコミュニケーションと意志の駆使が許される大きな喜びを培う。自由意志、つまり自己主張の可能な範囲を探り、この時期の子どもは生活の儀式化（儀式riteには「習わし」の意味もある）で徹底的に試してみる。試行しても直ぐ限界に突き当たり、上位の仲間が嘲笑的に反応する。皆が見ていると気づき赤面し、笑われるのを避けるためには自分と自分の行為を外から見つめ自分を判断（judge）する見方に自分の意思を順応させねばならない。このことはフロイドが超自我と呼んだ内的な自己-監視（自分と自分を監視する）の発達を要求する。

自分以外の者に「正しいと映る」ものはなにか、「正しくないと映る」ものは何かを具体的に試して確かめようとする。この時期になると、子どもは自分を「自分で監視」できるように訓練される。「是認」と「否認」が習わしとなる要素をエリクソンは裁判的（分別的）要素という。その要素は成人になると裁判という壮大な仕掛けで正義という名の下での懲罰の形で再確認される。

エリクソン(1977)は、例えば、子どものおもちゃ遊びの場面では、勝ち誇った自己のイメージに沿った振る舞いや、弱い他者を痛めつける(原文では殺す)ことが主になったりする。この状況で『遊ぶ子供』が、いかなる範囲の活動が彼に許されいかなる行動が彼を罪に陥れる(ダメ!という判断で否定される)のかを執拗に尋ねてくるのは、このためである。『……このためである』というのは、「是認」と「否認」の区別を確かめるためである。エリクソン(同)はこの「是認」と「否認」の区別する役割を分別的要素という(原文ではtrial, 裁判。従って裁判官のように是・非、清潔・不潔など分別する要素)。

このような場合「ヌミノース的な存在であった、大好きな母親や養育者に自分が否認されることは善(正義)ではない」と考えるからであろう。

エリクソンはこのことについて次のようにいっている。この幼児期という明確な人生段階に根ざした言葉と音による善と悪、清潔と不潔などの道徳的区別の日常化した儀式(的なもの)を、失敗をすることはあるが、人は善悪の境界を世代間で継承していく努力をする。成人はヌミノース的な要素を裁判(官)のイメージの人格化した具体的個人の中に、または正義(の人)の分類の中でも認める。いずれにしても、幼児期(本稿では2~4歳の歩行期に相当する)に獲得した道徳的区別を人は成人になるまでのその後の段階に吸収され持続しつづけることになる。これは人間の個体発生的・系統発生的適応(注4)に内在するものだという。

母親(養育者)が幼児期からこのような道徳的判断を下して子どもに接し、その判断が成人まで持続している。そうでない場合も含めて子どもに対するその責任は重いといえる。この段階は歩行期であり、本調査でもこの期の母の影響が特に多いが目立っている。

文化の型(行動のパターン)には必然的に伝統的に認められた「可と否の判断」がついてくる。

乳児期から幼児期における成長には、遊びばかりでなく生活のあらゆる場面で、清潔維持、健康維持、安全・危機管理などに「可と否の判断」を伴う「しつけ」と「躾」がついてまわり、それを母(養育者)は担うことになる。その結果、調査にあるように、この時期の母の影響の現存率が高いことは当然のことと考えられる。

現実に今、子どもに接している母親(養育者)

はすべてヌミノース的であり、裁判的かどうかは分からないが、基本的には子どもの傍にいれば、程度の差はあっても、この2つの要素は付随している。母親が外で仕事をする事で子どもとのこうした相互作用の時間が削減されると、どのような結果が生じるかは誰にも分からない。それが現在の「子育て」と「仕事」の問題の始まりと考えられる。

2) 母以外の影響の現存が増える段階

母以外の父、祖父母、教師、兄弟姉妹、友人などの影響の現存は、胎児期、乳児期、幼児期、歩行期、学童前期、学童中期までのスパンで、母の影響率が母以外の影響にとってかわりはじめるのは、「表4」におけるc)自己抑制と自立のクラスターの項目である。

子どもが自己を抑制するのは、自発が積極性となり、社会性(ルール遵守など)の獲得から、自律の獲得へと向い始める場面においてである。引き受けた仕事は責任を持って行い、親や先生の話の聞こうとし、人の意見は賛否両論を聞くようになり、友達の良いところは分るようになり、遊びや学校のルールは守るほう、自分を抑えて人の話を聞けるようになり、良いと思ったことは自分からしようとする項目はそれを物語っている。

母以外の影響が増えはじめるのは、5~7歳の学童前期のルールの遵守から8~12歳の学童中期の引き受けた仕事の責任、良いと思ったことを実践する、<32. 友達の良いところが分る、38. 人の意見は賛否両論を聞く>である。青年前期にかけて増えているのは32と38である。

歩行期は自己抑制の獲得、学童中期は勤勉性の獲得が特徴であるが、学童中期(12歳)と青年前期(13~17歳)の境界線上に母の影響が少なくなり始める時期がある。これ以降になると以下のような、これまでとは質の異なる発達課題が並ぶ別の段階が待ち受けており、母の影響が減少する期と重なっている。

3) 自己同一性と自立

このクラスターに属する項目は自分と向かい合い自分の個性や将来への可能性をみつめる段階にさしかかっていることを示唆している。

<3. 皆と一緒に遊ぶことを好んだ>は、ことを習得する歩行期から始まる集団の中の遊びに端を発する。歩行期から友達と交流し、人間関係をつくる。歩行期に確立した人とのつながりをいとわれない社会性の延長上にある<27. 自分の話し

は「ネ！聞いて」と言うほうだった）は、生涯そのまま持ち続ける傾向が望ましい。社交性は疎外が起こりがちな人間関係にとって重要だが成長に伴って個性が際立ってくると人の輪のつくり方も異なるものになってくる。

しかし、父や兄弟姉妹などと比較すると、母の影響の特徴は、青年後期（ここでは20歳）にいたってもなお、低下しながらも継続しているところにある。母子関係の基本的な型は、こうした自分を越えた影響も知りながら、子どもの成長に関心と影響をもち続けるところにあるとみられる。

4) 影響不明(者)の意味するもの

(1) 不特定多数の影響

子どもが歩行期、学童前期（5～7歳）頃までは不明者、すなわち不特定多数による影響は母の影響に接近はするが、母の影響を超えない。

しかし、回答者は誰かは不明だが影響は受けているとし、それもc) 自発と自律的行動、d) 自己同一性と自立のクラスターの項目になるにしたがって、不明者の影響が多くなる。

成長の途上にある青年後期（この調査の場合は20歳）までに受けた影響数とその影響が現在でもなお自分のためになっているとするのは、平均値で母（15.9%）が一番大きく、今でもそれが有効である（12.5%）としている。教師（2.2%）、兄弟姉妹（5.2%）を除くと、父、祖父母の影響が現在でも自分に有効に機能しているとするのは、わずか1%台であり極めて少ない。

自己抑制から自発、自律の方向に成長が進むにつれて不明の影響現存率が母よりも増え始め、c) クラスターの項目では影響数は完全に逆転する（表4）。自分はどうの人であるか、自分にはどのような能力や才能があるのか、どのような方向に進んでいるのか、と自分を他と比較し自分に向かい合う。この期の成長では、伸びようとする個性の自発的成長のほかに、学校教育の到達すべき水準のような自分以外からの影響、即ち周囲からの期待や要請もある。

(2) 不特定多数(不明者)の影響の背景

歩行期から学童中期までの影響率の推移では、学年が進行するにつれて当然のことであるが、不明者の影響数と影響の現存数が高くなる。これには家庭の養育者から離れる時間が多くなり、学校での仲間、クラブ活動の仲間、近隣の人たち、TV、本などの不特定多数の影響が考えられる。

この調査は、認知面や運動能力、芸術的資質と

いう、言わば個人の個性に関わる、あるいは個人に備わる能力などでなく、一般的な人格的側面の発達に関する内容で行った。そのため、主として認知・スポーツ技能・科学の側面の教育をにいう教師の影響（率）が期待よりも低いのは当然であろう。

不明者の影響という極めて曖昧なもの影響力は、共同社会に備わる教育力ということになるかもしれない。例えば、自然環境、生活空間、子ども達が通う学校という組織や地域の人たちなどを含む多くの要素には、集団としては意識にのぼらない、いわゆる地域の教育力となっていると考えられる。地域そのものもつ力子どもや私たちの成長の、数式でいえば共通項のような機能を果たしていると考えられる。

Paul Bloom (2004) は「進化論の立場からは、私達の運命は、遺伝子を同じくする親族、とりわけ子どもに直結している。さらに人間を含む多くの動物は、家族より大きな集団社会の中で協調して生きるように進化してきた。そして、互いがそれぞれの利益のために働くようになった。そのため、私たちが他者の心を理解する方法はもっと穏やかである。私たちは人にもものを教えることができる。これは、自分より物事を知らない相手の心の状態を敏感に察知する行為であり、それと同時に言葉や動作を工夫して、教える相手に新しい精神的、肉体的な能力をあたえることだ」と言っている。地域の教育力という言葉があるが、それは私たちの住む共同体そのものは、教える力を備えており、それが子どもを教育するというのである。

ポール・ブルームが言うように、その地域に住む子どもの親を含む地域の人たちは無意識のうちに子どもたちを教育しているということである。地域の教育力は、本来、他人に、とりわけ子どもに能力を賦与するように進化してきたというのである。人は意図的に子どもに接していないが、子どもも大人も人と接し交流する場合、そこでは個性の違いを出し合って影響し合って、そのような能力を常に伝達しあっていることは確かである。本調査で誰にとは特定できない不明な人たちから受けた影響は、そのような教育の影響を含んでいると、当面は考えるのが妥当のようである。

V. 結論

上記の結果、本調査の回答者については以下のことが明らかになった。

1. 子どもの成長に対する母の影響は、生活の基本的な習慣形成と家庭、社会生活の基本的な型の習得に対して大きい。この影響は父、祖父母、兄弟姉妹、教師よりもはるかに大きく、青年後期でも影響は少しずつ減少するが持続している。
2. 子どもの成長に対する母の影響が軽減する時期がある。それは、子どもが歩行期に自己抑制の能力を獲得した後の学童中期（8～12歳）と青年前期（13～17歳）の境界を越えるときと重なっている。
3. 本調査では誰に影響を受けたかは分からない影響が、学童中期から青年後期にわたって多くあった。これは、集団社会は目に見えないような形で人に教える機能があると考えられる。

人は家族より大きな集団社会の中で、人に教えることで相手に新しい精神的、肉体的な能力を与えるように協調して生きるように進化してきたと考えるのが適切だからである。

上記2の学童中期までに母親の影響が極めて大きいことが分かった。また日本人女性の労働力率は依然として30歳代に下降するM字型カーブを描いており、欧米諸国と比べると家庭と仕事の両立は少ない傾向にある。

本稿における学童前期の子どもに母親が及ぼす影響が大きいことと、30歳代の女性の労働力率のM字型下降（高橋、橋本編、2008）と何らかの関わりがあるのかもしれない。それに関わる詳細の検討は母親（養育者）のヌミノース的要素（機能）分別的（裁判的）要素（機能）も含めて今後の課題としたい。

（謝辞）

本調査のためにこころよく協力してくれた学生諸氏には心から感謝の意を表します。

（注1）

親（順）社会的行動（型）は社会的秩序の順守や他人の自由や平等を侵さないばかりでなく、愛他行動のように報酬を期待しないで他人に利益をもたらす行動までである。つまり、社会的に好ましい行動として受け入れられ、その反対（否定）は反社会性を帯びるので受け入れられない特性（選択は1か0）がある。本調査で用いた項目はその類の親社会的行動で構成してある。個々の調査項目は、ノーマルな親（養育者）は「我が子はその

ように成長発達して欲しい」と考え、その逆は決して願わない項目である。教育者は教育的良心（倫理観）にかけて個々の調査項目の逆が好ましいとは決して考えない。子ども自身も、例えば〈友達はいじめも意地悪もしない、人の物をことわりなしに取らない、決りは守る・・・だからいい人だ〉というように分かる。この種の判断行動は当たり前のこととして容認できるように発達するほうが望ましく、逆は社会的に容認されにくい。

こうした親（順）社会的行動（型）の場合、クロンバックの信頼係数 a は、調査項目数 n で（分散） 2 は、 $\sigma^2 = (\text{個々の得点} - \text{平均値})^2 \div 0$ となる可能性が極めて高いので、信頼度は常に $a = n / (n - 1) \div 1$ で、 a は1の近似値で信頼性はほぼ100%となる。

（注2）

エリクソン（1977、近藤邦夫訳、2000）は幼い子どもの玩具での遊びは仕事（創造）と物語の創造という二つの「創造性」の舞台を提供し絵本は色彩豊かな事物や本人と入れ替り易い人物が登場するもう一つの別の舞台で物語が展開し、固有の文化的な刻印や方向づけがなされると述べている。

しかし、実際の家庭生活では認知面の成長促進に加えて、半強制的なしつけという社会化が必要であり、遊びの後には現実の生活秩序の回復（後片付け）が待っている。それで幼児の遊びには「創造と秩序」が含まれる。本調査ではその部分を起点とした。

（注3）

このことばは、授業で使用した〈ビデオ教材「サクランボほうやー幼児の全面発達を求めてー」全6巻、（制作）共同映画株式会社／青銅プロダクション、（制作協力）さくら・さくらんぼ保育園〉から引用した。

三歳児神話とポウルビィの「母性的人物の喪失」は直接的な関係はない。本稿もそれとは無関係である。

母子関係についてJ. ボールビィ（1969）は、幼児期に母性的人物との分離を経験し、母性的な養育を十分に受けられなかった子どもは、後の人格に影響を与える可能性があるだろうという見解を示した。また、この考えに対して、母性的人物の喪失が主な原因であることも認めてそれによってもたらされる悪影響を取り除くことは比較的容

易であって、人格異常になるとは考えられないという別の主張もあるとボールビィは報告している。

しかしボールビィのこのような考えは、後の三歳児神話に発展し、幼少期の母性の重要性が広まる契機となった(小西行郎、2004)。

この幼児教育の記録でも、「三歳児は幼児期の中でもとりわけ大切な時であり、小さな意志／意思が芽生える時である」と指摘している。そうした幼児期の小さな意志／意思は、教育と家庭などの環境の影響で、あるいは自発的またはモデリングなどによってしつけなどの人格形成の要素となると考えられるが、それらの要素が何歳頃に獲得され、現在まで継続しているのか、その発達上の詳細な消長については明確には分っていなかった。神話は、比喩的に、根拠もないのに絶対的なものと信じられている事柄であり、「三つ子の魂百まで・・・」と言いつつ習わされた。三つ子は三歳の子、転じて幼い子を意味し、一般に「三つ子の魂百まで」とは「幼い頃の性格は、年をとっても変わらない」といわれてきたのである。

ここでは母子関係の問題として、ボールビィがいう母性的人物の喪失が人(子ども)の成長に与える影響は別として、母性的人物がどの程度子どもの成長に影響をあたえるのか、その影響が現在の時点でどの程度継続するかをエリクソンの発達区分(各期)の視点から確認したいという考えで調査をした。

「母性的人間の喪失の影響」は、長年に及ぶ個人の追跡調査を必要とする。それには難しい問題と作業を伴うだろうと考えられる。三歳児神話は神話としてあることのほうが楽しいかもしれない。(注4)

Eriksonがここで言う「個体発生的・系統発生的適応」とはダーウインの「適応の原理」を指していると思われる。

(文献)

- Barbara M. Newman and Philip R. Newman (1984) :DEVELOPMENT THROUGH LIFE (3rd ed.) 福富護訳 (1997) 生涯発達心理, p.35, 学川島書店
- E.H. Erikson (1963) : CHILDHOOD AND SOCIETY, Norton, 仁科弥生訳, 幼児期と社会 1 (1981), pp. 347-351、みすず書房
- E. H. Erikson (1977) TOYS AND REASONS, 近藤邦夫訳 (2000) 『玩具と理性』 pp.26-31, みすず書房

- E. H. Erikson (1982) THE LIFECYCLE COMPLETED, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳 (1997) 『ライフサイクル、その完結』 pp.71-31, みすず書房
- 伊藤榮子 (2002) : 家庭を持つ看護師と母子関係の形成, p. 56, pp. 108-109, pp. 174-186、医療文化社,
- John Bowlby (1969) : ATTACHMENT AND LOSS, Vol.1 Attachment , The Hogarth Press、黒田, 大羽, 岡田訳 (1981) : 母子関係の理論 p.vii、岩崎学術出版小西行郎 (2004) : 早期教育と脳 : (新書162), p.120, 光文社
- 内閣府「男女共同参画」(2008)
- 西平直 (1996) : エリクソンの人間学 The Psychology and Philosophy of E. H. Erikson, 東京大学出版会
- Paul Bloom : Descartes' Baby : How the Science of Child Development Explain What Makes 春日井晶子訳 (2006) : 赤ちゃんはどこまで人間なのか, p. 15, ランダムハウス講談社
- 高橋真理、橋本淳子 (編) (2008) : 女性のライフサイクルとナーシング, p. 134, ヌーヴェルヒロカワ
- 西原由紀乃 (2008, 小林康江, 遠藤俊子, 他) : 妊婦が抱く育児に対するイメージ —第1子を育児中の母親との比較から—, 母性衛生 Vol. 48, pp. 462 - 470

表1 影響を与えた人たちと影響を受けた段階(期)

No	調査項目	影響を与えた人たちの数と影響現存数(カッコ内は現存数)					影響を受けた段階(期)の数									
		母	父	祖父母	教師	*計	その他	不明	計	歩行	学前	学中	青前	青後	不明	
1	おもちゃや絵本の後片付けができた	25(15)	1(1)	3(2)	1(1)	5(4)	16(10)	18(6)	35(54.7)	51	10	0	0	0	3	
2	お母さんの準備などを手伝おうとした	35(23)	0	4(4)	2(1)	2(1)	6(2)	16(5)	36(54.7)	26	27	5	2	0	4	
3	靴と一緒に洗ぶことを好んだ	5(4)	0	0	1(0)	1(0)	3(2)	27(19)	43(67.2)	47	11	4	0	0	2	
4	近所の人に挨拶ができるようになった	32(26)	1(1)	3(1)	1(1)	5(3)	9(8)	18(9)	46(71.9)	43	18	1	0	0	2	
5	お友達には親切にするようになった	17(13)	2(1)	0	5(4)	7(5)	7(7)	33(18)	43(67.2)	30	27	2	0	0	5	
6	自分で着替えることができるようになった	11(7)	4(2)	1(1)	1(1)	11(6)	6(4)	36(21)	38(59.4)	15	32	10	1	0	6	
7	礼儀正しいほうだった	25(20)	1(1)	3(2)	6(2)	10(5)	4(3)	23(12)	38(59.4)	22	29	3	0	0	2	
8	遊びや学校のルールは守るほうだった	12(10)	0	1(1)	10(9)	11(10)	8(4)	33(21)	45(70.3)	21	40	1	0	0	2	
9	家では自分の分組の仕事があった	16(9)	1(1)	0	3(2)	4(3)	38(11)	28(40.6)	10	33	6	1	0	14		
10	引き上げた仕事は責任をもって行った	13(11)	1(6)	0	7(6)	8(2)	4(3)	39(21)	47(73.4)	9	30	15	1	1	8	
11	10円儲けの習慣ができた	36(33)	0	0	0	0	4(2)	24(12)	47(73.4)	52	9	0	0	0	3	
12	12歳になった手紙は書けるようになった	24(19)	2(2)	1(1)	2(2)	5(5)	6(4)	29(10)	38(59.4)	35	23	2	0	0	4	
13	食べ物の好き嫌いをなくそうとした	16(9)	2(1)	1(1)	5(3)	8(5)	7(5)	33(8)	27(42.2)	18	20	9	1	1	15	
14	お部屋の散らかっている気がなくなった	20(13)	1(1)	1(1)	0	2(2)	3(2)	39(10)	27(42.2)	3	26	15	5	0	15	
15	手足や爪をきれいにした	30(25)	0	0	3(2)	4(3)	2(1)	28(16)	43(67.2)	12	28	20	0	0	4	
16	1人でお風呂が使えるようになった	30(25)	0	0	3(2)	2(1)	2(1)	39(17)	46(71.9)	22	23	2	0	0	6	
17	知らない人にはついて行かなかった	23(19)	1(0)	1(0)	1(0)	2(0)	6(6)	33(19)	44(68.8)	6	37	16	1	0	4	
18	18必要など自分準備できるようになった	14(13)	0	0	0	0	8(6)	42(19)	38(59.4)	18	21	12	4	0	9	
19	19お風呂の洗い方は自分でできるようになった	13(10)	1(1)	0	1(0)	2(1)	4(1)	45(14)	28(40.6)	12	15	14	5	0	18	
20	20お部屋の掃除は自分でできるようになった	21(20)	0	0	0	0	9(8)	34(16)	46(71.9)	45	16	1	0	0	2	
21	21下着などは自分で着ようとした	21(14)	2(2)	6(4)	1(0)	9(6)	5(5)	29(11)	36(56.3)	23	29	4	2	0	6	
22	22父親や先生の話を聞こうとした	11(11)	2(2)	0	5(3)	7(5)	6(6)	40(23)	45(70.3)	28	29	4	0	0	3	
23	23良いと思ったことは自分からしようとした	8(7)	2(2)	1(1)	3(2)	6(5)	10(9)	40(15)	36(56.3)	14	28	11	3	0	8	
24	24本を読むことが好きになった	15(10)	3(2)	2(2)	1(1)	6(5)	4(1)	39(11)	27(42.2)	25	19	9	3	0	8	
25	25考えたり工夫したりするようになった	4(2)	5(3)	0	3(3)	8(6)	9(6)	31(15)	27(42.2)	11	22	18	2	0	11	
26	26将来向になりたい職業について話した	7(5)	3(3)	0	3(2)	6(5)	6(3)	45(14)	27(42.2)	13	27	8	4	1	11	
27	27お部屋の掃除は自分でできるようになった	6(6)	1(1)	1(1)	3(2)	5(4)	5(5)	48(22)	37(57.8)	2	15	25	8	1	13	
28	28お部屋の掃除は自分でできるようになった	7(5)	1(1)	0	1(1)	2(2)	6(6)	49(26)	39(60.9)	2	15	27	7	2	11	
29	29お部屋の掃除は自分でできるようになった	11(8)	1(1)	1(1)	0	2(2)	3(2)	48(16)	30(46.8)	6	24	21	26	6	0	5
30	30友達の良いところは自分からしようとした	18(15)	1(1)	0	4(2)	4(2)	10(10)	43(25)	44(68.8)	6	24	26	6	0	5	
31	31自分で着替えることができるようになった	13(11)	1(1)	0	3(2)	4(3)	5(5)	37(18)	41(61.1)	9	33	13	2	0	7	
32	32自分で着替えることができるようになった	22(18)	4(4)	0	1(0)	5(4)	3(3)	34(20)	45(70.3)	28	23	5	0	1	7	
33	33自分で着替えることができるようになった	7(6)	3(3)	0	1(1)	4(4)	6(6)	47(24)	40(62.5)	5	18	25	7	0	9	
34	34お部屋の掃除は自分でできるようになった	6(5)	3(2)	0	0	5(5)	5(5)	50(26)	38(59.4)	2	12	28	10	2	10	
35	35お部屋の掃除は自分でできるようになった	11(10)	1(1)	0	1(1)	2(2)	6(6)	45(20)	40(62.5)	3	8	25	10	3	15	
36	36お部屋の掃除は自分でできるようになった	11(9)	3(2)	0	3(3)	6(5)	5(5)	42(21)	40(62.5)	3	9	29	13	2	8	
37	37お部屋の掃除は自分でできるようになった	7(6)	2(1)	0	1(1)	3(2)	6(5)	48(24)	37(57.8)	2	6	29	12	3	12	
38	38お部屋の掃除は自分でできるようになった	14(13)	2(2)	0	1(1)	3(3)	5(5)	42(21)	42(65.6)	1	2	23	18	8	12	

(注) 表中、歩行は歩行期、学前は学童前期、学中は学童前期、青前は青年前期、青後は青年後期、その他は兄弟姉妹、友達、不明は影響を与えた人とはならないと回答した者の数。現存率は全回答者の合計(カッコ内はその%)。*計は父、祖父、教師の合計。

表2 歩行期～学童中期に受けた影響(率)の推移

No	調査項目	①歩行期		②学童前期		①+②		③学童中期		①+②+③	
		2~4歳	5~7歳	%	8~12歳	%の推移					
1	靴と一緒に洗うことを好んだ	73.4	17.2	90.6	6.3	96.9					
2	近所の人に挨拶ができるようになった	67.2	28.1	95.3	1.6	96.9					
3	遊びや学校のルールは守るようになった	32.8	62.5	95.3	1.6	96.9					
4	下着などは自分で着ようとした	70.3	25	95.3	1.6	96.9					
5	歯磨きの習慣ができた	81.3	14.1	95.4	0	95.4					
6	親や先生の話を聞こうとした	43.8	45.3	89.1	6.3	95.4					
7	手足や爪をきれいにした	18.8	43.8	62.6	31.3	93.9					
8	家では自分で着替えるようになった	54.7	35.9	90.6	3.1	93.7					
9	おもちゃや絵本の後片付けができた	79.7	15.6	95.3	93.5	93.5					
10	お友達には親切にするようになった	46.9	42.2	89.1	3.1	92.2					
11	必要なこと自分で準備できるようになった	9.4	57.8	67.2	25	92.2					
12	食べ物の好き嫌いをなくそうとした	40.6	42.2	82.8	7.8	90.6					
13	1人でお風呂が使えるようになった	34.4	46.9	81.3	7.8	89.1					
14	自分で着替えることができるようになった	23.4	50	73.4	15.6	89.1					
15	父親や先生の話を聞こうとした	35.9	45.3	81.2	6.3	87.5					
16	下着などは自分で着ようとした	43.8	35.9	79.7	7.8	87.5					
17	引き上げた仕事は責任をもって行った	14.1	51.6	65.7	20.3	86					
18	礼儀正しいほうだった	34.4	46.9	81.3	23.4	84.4					
19	良いと思ったことは自分からしようとした	21.9	43.8	65.7	17.2	82.9					
20	本を読むことが好きになった	38.1	29.7	67.8	14.1	81.9					
21	友達や先生の話を聞こうとした	9.4	32.8	42.2	40.6	82.8					
22	良いと思ったことは自分からしようとした	42.2	35.9	78.1	3.1	81.2					
23	知らない人にはついて行かなかった	28.1	32.8	60.9	18.8	79.7					
24	考えたり工夫したりするようになった	17.2	34.4	51.6	28.1	79.7					
25	将来向になりたい職業について話した	15.6	51.6	67.2	9.4	76.6					
26	お部屋の掃除は自分でできるようになった	45.3	20.3	65.6	6.3	71.9					
27	お部屋の掃除は自分でできるようになった	20.3	42.2	62.5	12.5	75					
28	お部屋の掃除は自分でできるようになった	7.8	28.1	35.9	39.1	75					
29	自分で着替えることができるようになった	28.1	31.3	59.4	14.1	73.5					
30	自分で着替えることができるようになった	37.5	21.9	59.4	14.1	73.5					
31	自分で着替えることができるようになった	4.7	40.6	45.3	23.4	68.7					
32	自分で着替えることができるようになった	3.1	23.4	26.5	42.2	68.7					
33	自分で着替えることができるようになった	3.1	18.8	21.9	43.8	65.7					
34	自分で着替えることができるようになった	3.1	23.4	26.5	39.1	65.6					
35	自分で着替えることができるようになった	4.7	14.1	18.8	45.3	64.1					
36	自分で着替えることができるようになった	3.1	9.4	12.5	45.3	57.8					
37	自分で着替えることができるようになった	4.7	12.5	17.2	39.1	56.3					
38	自分で着替えることができるようになった	1.6	3.1	4.7	35.9	40.6					
39	自分で着替えることができるようになった	29.5	33.1	62.6	18.3	80.9					
40	平均										

表3 母、父、祖父、祖母、教師、その他、不明(者)の影響数と現存数

順位 No	調査項目	母		父		祖父		祖母		教師		その他(兄弟姉妹友人)		不明			
		影響数	現存数	影響数	現存数	影響数	現存数	影響数	現存数	影響数	現存数	影響数	現存数	影響数	現存数		
1	11 歯磨きの習慣ができた	36	33	0	0	0	0	0	0	0	0	4	2	24	12		
2	2 食事の準備などを手伝おうとした	35	23	0	0	4	4	2	1	2	1	2	8	16	5		
3	4 近所の人に挨拶ができるようになった	32	26	1	1	3	1	1	1	1	1	2	18	9			
4	16 ハンカチや下着は清潔にしていた	30	25	0	0	0	0	3	2	2	2	1	1	28	18		
5	15 手足や爪をきれいにしていた	30	23	2	2	1	1	1	0	2	1	1	28	16			
6	7 乳歯正しい歯磨きをしていた	25	20	1	1	3	2	6	2	4	3	25	10				
7	1 おもちゃや絵本の後片付けができた	25	15	1	1	3	2	1	1	1	1	10	18	6			
8	12 家へ帰ったら手洗いと靴を替えるようになった	24	19	2	2	1	1	2	2	2	2	6	4	29	10		
9	18 必要なものは自分で準備できるようになった	23	19	1	0	0	0	1	0	3	6	6	33	19			
10	34 コミは決められた方法で捨てた	22	18	4	4	0	0	1	0	3	3	3	34	20			
11	21 下着などは自分で着ようとした	21	20	0	0	0	0	0	0	0	9	8	34	18			
12	22 玄関で脱いだクワはそろえた	21	14	2	2	6	4	1	0	5	5	29	11				
13	17 知らない人にはついて行かなかった	20	18	2	2	2	1	1	3	3	2	3	36	17			
14	14 お部屋が散らかっていると感じた	20	13	1	1	1	0	1	0	3	2	3	39	10			
15	33 困っている人には親切にするほうだった	18	15	1	1	0	0	3	2	5	5	5	37	18			
16	5 お友達には親切にするほうだった	17	13	2	1	0	0	5	4	7	7	7	33	18			
17	9 家で自分の分組の仕事があった	16	8	1	1	0	0	3	2	6	4	4	38	11			
18	13 食べ物の好き嫌いをなくそうとした	16	9	2	2	1	1	5	3	7	7	5	33	8			
19	25 本を読んだり好きな本を読んだ	15	10	3	2	2	2	1	1	4	1	5	39	11			
20	40 親や先生の話は聞こうとした	14	13	0	0	0	0	1	1	5	5	5	42	21			
21	19 危ないことほしくないようにした	14	13	2	2	0	0	0	0	8	6	6	42	19			
22	10 引き分けたり責任をわけて行った	13	11	1	1	0	0	7	6	4	3	39	21				
23	20 体調不良のときは無理をしなかった	13	10	2	2	0	0	1	0	4	1	4	45	14			
24	8 遊びや学校のルールは守るほうだった	12	10	0	0	1	1	10	9	8	4	33	21				
25	23 親や先生の話は聞こうとした	11	11	2	2	0	0	5	3	6	6	40	23				
26	37 親は子どもに責任があると感じた	11	10	1	1	0	0	1	1	6	6	6	45	20			
27	38 人の意見は賛否両論を聞くようになった	11	9	3	2	6	4	3	3	5	5	5	42	21			
28	6 自分を助けて人の話をきけるようになった	11	7	4	2	1	1	6	3	6	3	6	4	36	21		
29	31 大抵はニコニコして機嫌がよいほうだった	11	8	1	1	1	0	0	3	3	3	2	48	18			
30	24 思いと思ったことは自分からしようとした	8	7	2	2	1	1	1	1	4	2	10	9	40	15		
31	32 友達の良いところは分るようになった	7	7	0	0	0	0	4	2	10	10	10	43	25			
32	30 物事を予測して行動できるようにした	7	5	1	1	0	0	1	1	6	6	6	49	26			
33	35 自分の失敗は自分の責任だと気づいた	7	6	3	3	0	0	1	1	6	6	6	47	24			
34	39 論理的に考えようとした	7	6	2	1	0	0	1	1	6	5	48	24				
35	28 将来何になりたいかよく話した	7	5	3	3	0	0	3	2	6	3	50	14				
36	36 判断はいろいろ検討して決めた	6	5	3	2	0	0	0	0	5	5	5	45	26			
37	29 理解や現実のためには少し辛くとも我慢した	6	6	1	1	1	1	3	2	5	5	5	48	22			
38	27 自分の話には「聞いて」と言うほうだった	6	3	1	1	0	0	0	0	6	3	51	15				
39	3 皆と一緒に遊ぶことを好んだ	5	4	0	0	0	0	1	0	31	26	27	13				
40	26 考えたり工夫したりするほうだった	4	2	5	3	0	0	1	1	9	6	43	13				
平均		15.9	12.5	1.6	1.3	1	0.8	2.2	1.5	6.3	5.2	36.9	16.6				

N=64

表4 母の順位から見た影響現存率と学童中期までの影響率

順位 No	調査項目	現存率(%)				影響率(%)
		母	母以外	不明者	全体の合計	
a) 生活の基本的な習慣の形成：主に歩行期の課題						
1	11 歯磨きの習慣ができた	51.6	31	28.1	62.8	95.4
2	4 近所の人に挨拶ができるようになった	40.6	17.2	14.1	71.9	96.9
3	16 ハンカチや下着は清潔にしていた	39.1	4.7	28.1	71.9	89.1
4	15 手足や爪をきれいにしていた	35.9	6.3	25	67.2	93.9
5	2 食事の準備などを手伝おうとした	35.9	10.9	7.8	54.6	90.6
6	21 下着などは自分で着ようとした	31.3	12.5	28.1	71.9	96.9
7	7 乳歯正しい歯磨きをしていた	31.3	12.5	15.6	59.4	84.4
平均		36.7	9.6	21	68.5	
b) 家庭・社会生活の基本的な型：主に学童前期の課題						
8	18 必要なものは自分で準備できるようになった	29.7	9.4	29.7	68.8	92.2
9	12 家へ帰ったら手洗いと靴を替えるようになった	29.7	14.1	15.6	59.4	93.7
10	34 コミは決められた方法で捨てた	28.1	10.9	31.3	70.3	87.5
11	17 知らない人にはついて行かなかった	28.1	12.5	26.6	67.2	81.2
12	33 困っている人には親切にするほうだった	23.4	12.5	28.1	64	86
13	1 おもちゃや絵本の後片付けができた	23.4	21.9	9.4	54.7	93.5
14	22 玄関で脱いだクワはそろえた	21.9	17.2	17.2	56.3	87.5
15	5 お友達には親切にするほうだった	20.3	18.8	28.1	67.2	92.2
16	40 親の愛護は子どもの成長の助けになると気づいた	20.3	12.5	32.8	66.6	40.6
17	19 危ないことほしくないようにした	20.3	9.4	29.7	59.4	79.7
18	14 お部屋が散らかっていると感じた	20.3	6.3	15.6	42.2	68.7
平均		24.1	13.2	24	61.4	
c) 自己調整と自律：主に学童中期の課題						
19	10 引き分けたり責任をわけて行った	17.2	23.4	32.8	73.4	84.4
20	23 親や先生の話は聞こうとした	17.2	17.2	35.9	70.3	95.4
21	19 危ないことほしくないようにした	15.6	21.9	32.8	70.3	96.9
22	37 親は子どもに責任があると感じた	15.6	12.5	31.3	59.4	86.3
23	25 本を読んだり好きな本を読んだ	15.6	9.4	17.2	42.2	82.9
24	20 体調不良のときは無理をしなかった	15.6	31	21.9	40.6	64.1
25	38 人の意見は賛否両論を聞くようになった	14.1	15.6	32.8	62.5	64.1
26	13 食べ物の好き嫌いをなくそうとした	14.1	15.6	12.5	42.2	73.5
27	31 大抵はニコニコして機嫌がよいほうだった	12.5	6.3	28.1	46.9	75
28	9 家で自分の分組の仕事があった	12.5	10.9	17.2	40.6	76.6
29	32 友達の良いところは分るようになった	10.9	18.8	39.1	68.8	82.8
30	6 自分を助けて人の話をきけるようになった	10.9	15.6	32.8	59.3	89
31	24 思いと思ったことは自分からしようとした	10.9	21.9	23.4	56.2	82.9
平均		14.1	14.8	27.5	56.4	
d) 自己同一性の確立と自立：青年前期から青年後期初めの課題						
32	35 自分の失敗は自分の責任だと気づいた	9.4	15.6	37.5	62.5	75
33	39 論理的に考えようとした	9.4	10.9	37.5	57.8	57.8
34	29 理解や現実のためには少し辛くとも我慢した	9.4	14.1	34.4	57.9	65.6
35	30 物事を予測して行動できるようにした	7.8	12.5	40.6	60.9	68.7
36	36 判断はいろいろ検討して決めた	7.8	10.9	40.6	59.3	65.7
37	28 将来何になりたいかよく話した	7.8	12.5	21.9	42.2	75
38	3 皆と一緒に遊ぶことを好んだ	6.3	40.6	20.3	67.2	96.9
39	27 自分の話には「聞いて」と言うほうだった	4.7	4.8	23.4	32.9	75
40	26 考えたり工夫したりするほうだった	3.1	18.8	20.3	42.2	79.7
全体平均		19.5	13.6	26.1	59.3	

母以外：本表では父・祖父・祖母・教師・兄弟姉妹・友人などをさす。*a), d): 母以外と比較して p<0.05。

全体平均：母以外と比較して p<0.05。